

エクストラネットにおける企業間状況共有：Team-V

ベンチャー 8

小山高明 梶原清彦

NTT ソフトウェア研究所

1 はじめに

ビジネスにおけるインターネットの利用が進み、各企業は社内システムを導入することでコストダウンを図ってきた。しかし、今日のビジネス世界の変化で、市場ニーズに即応したビジネス展開に変わり、複数の企業や部門が短期間協力しあって仕事をするようになりつつある。これにより、例えば、部門を超え企業の枠を超えて、スケジュールなど進捗状況を共有できる環境を、短期間で構築しなければならない。本稿では、企業間の状況を共有できる環境：Team-Vを紹介する。Team-Vは、多様なシステムをファイアーウォールを超えて結びつけることが可能な新しいシステム間連携技術 Bespa を利用して、複雑なプログラミングなしでは連携できない異なるグループウェア製品を、簡単に連動させることができる。

2 企業間にまたがる環境構築の問題点

現在、多くの企業では、閉鎖型ネットワーク上でグループウェア製品などの社内システムをそれぞれ導入している。企業間で進捗状況の共有環境を構築するためには、異なる種類の社内システムの連携と、閉鎖型ネットワークを超えた連携を実現させなければならない。CORBA を用いた場合では、一方の企業での社内システムの変更だけでなく、連携先企業側のプログラムの修正作業も不可欠となる。また、閉鎖型ネットワーク同士の連携に、仮想プライベートネットワーク (VPN) を用いた場合は、連携構築や連携先の変更にも多くのネットワークの管理者との話し合いと、多くのマシンの

設定変更が必要となる。このように、市場ニーズに即応して企業間状況共有を短期間で柔軟に行うことは難しい。

3 Bespa によるシステム連携

3.1 Bespa の概念

Bespa は、短期間で連携環境を構築できるシステム間連携技術である。Bespa は、図1のように、各企業内に閉じているシステムを仲介サーバー (Mediator) によって、プロトコルの変換、コンテンツの変換をさせることでシステム間連携を実現している。Bespa の仲介サーバー上では、通信プロトコルやデータフォーマットの違い、時間のずれ、ファイアーウォールの存在などの問題を解消できるため、様々な社内システムと閉鎖型ネットワークを超えて連携が可能となっている。

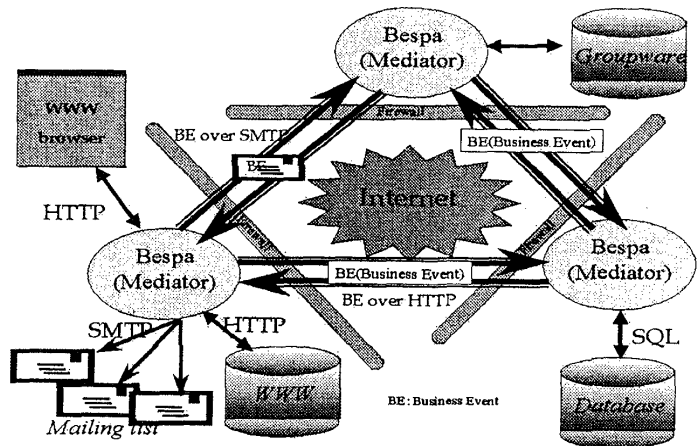


図1 Bespa によるシステム連携

3.2 Bespa のアーキテクチャ

Bespa は、BE (Business Event) という仕事依頼用の情報コンテナを用いて非同期で通信を行う仲介型

連携システムである。Bespa の仲介サーバーは、図2のように、受信した仕事依頼(Business Event)を予め指定しておいた設定表(BET:Business Event Table)に従い、仲介サーバーの核であるBES(Business Event Server)が、BED(Business Event Driver)というプログラムを起動させ、仲介作業を行っている。BEDの主なものは、仕事依頼の転送、仕事の中身であるコンテンツの変換や、通信プロトコル変換、さらに新たな仕事依頼の送信などである。システム間の連携がBET上のBED名の書き換えによって実現できるため、企業間状況共有の短期間構築やその変更が簡単に行える。

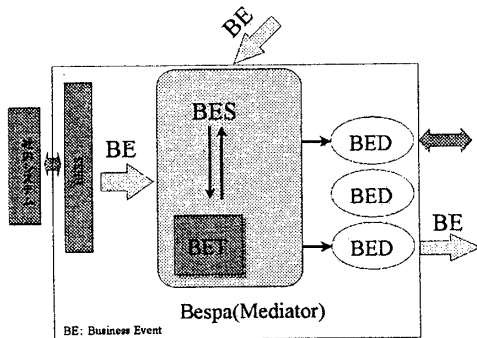


図2 Bespaの仲介サーバー(Mediator)の内部構造

4 Team-Vでの適用例

Team-Vの例となるグループウェア製品連携の実際の画面を図3に示す。この画面は2つの製品によるガントチャートの表示であり、一方のデータを変更すると他方の対応するデータが自動的に書き換えられる。このためのBespaの構成を図4に示す。

5 まとめ

市場ニーズに即応した企業間状況共有環境：Team-Vの構築が求められているが、既存技術では対応させるべく、Bespaを利用することである程度解決できることを述べた。Bespaは、基本的には企業の情報システムを部品として結び付ける糊であり、これにより企業間にまたがったグローバルシステムが簡単に構築できる。Bespaをビジネスとして成功させるためには多様な製品に対応したBEDの充実と企業間にまたがるグローバルシステムの構築ノウハウの蓄積が必要である。

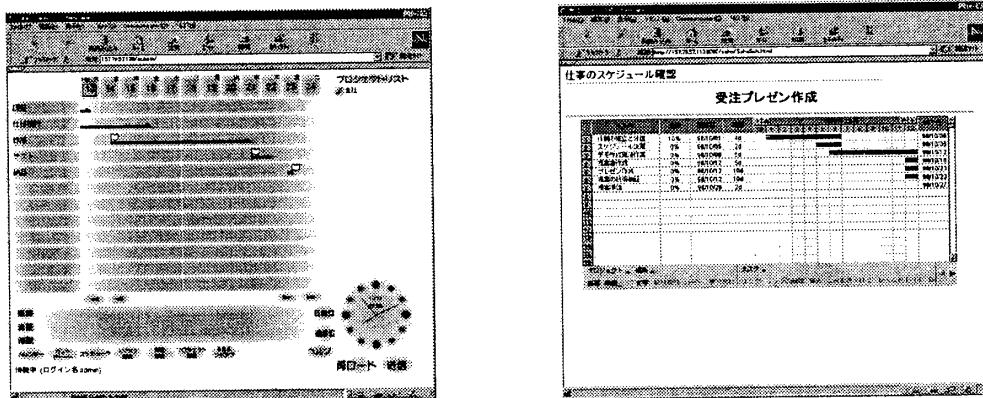


図3 Team-Vによるグループウェア製品の連携画面

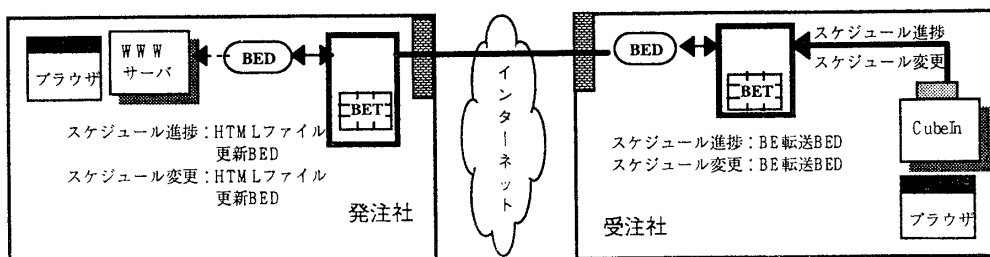


図4 グループウェア製品連携へのBespaの適用例